

感情をさらけ出す

「危機」が聴く者を光速で時空、そしてアルバムの片面全体（当時はアルバムにA面B面があった）を駆け巡る旅に攫っていくのだとしたら、B面のオープニング曲はまるで囁くように曲へ引き込んでくる。エディ・オフォードの親密感のあるレコーディングからスタジオの様子がひしひしと伝わってくる。スティーヴ・ハウがオープニングのギターパートを弾こうと構える様子が目に浮かぶようだ。

「エディが確かヘッドホンで『回しているぞ』って言って、私が『オーケー』って返して弾き始めたんですよ」とスティーヴは話す。「あのイントロは気になりますよね。最近またスタジオ版のアルバムを聴いたんですが、とてもよかったです。ハーモニクスで爪弾いているだけなんです。ああいうふうにやって、会話も入れたのは確かにいいですね。そういう感じで始めようっていうアイデアから広がったんです。

録音されているって分かっていたと思いますが、

私はてっきり、『オーケー』って言ってから録音し始めるんだと思っていたんですよ。

どうなったか聴いてみて『なかなかいいじゃないか』って思ったんでしょうね。

レコードで誰かが何か喋るなんてなかなかありませんから。どういう経緯だったか分かりませんがそのままになったんです」。

「あのハーモニクスすごいいいですね、完璧に合っているし。で、そう思ったら走り出しているんですよ」とビリー。

「本当に素晴らしい一瞬をとらえていて、こういった瞬間に自然に生まれるイエスの伝説のひとつですよ。

完全に前もって決まっていたように見えるけれど、その瞬間に色々なことが起こっていて、それを収めているんですよ」。

「ジョンはスティーヴが弾くハーモニクスの音が好きでしたね。

この前の『ラウンドアバウト』でもこの曲でも」とエディは振り返る。

「スティーヴが出だしに使うハーモニクスのパートを作曲したんですが、サスティンに苦労しましてね。

スティーヴがハーモニクスを変えればサスティンも止めて次に進まないといけませんでしたから。

でも本人はそれを全部つながるようにしたいって言うんですよ（物理的に不可能でも）。

それで違うトラックを複数使って、1、3、5、7の音を1つのトラックに、2、4、6、8の音を別のトラックに録音して、

それをひとつにつなげて1人が弾いているかのように聴こえるようにしたんです。うまくいきましたよ。

あれって『ラウンドアバウト』だったっけ？」。

「同志」はウナ・ビリングス・スクールでのリハーサル中にみんなで作り上げた曲だとスティーヴは語る。

「閃いちゃったんですよ。制作猶予は長くて2週間くらいしかなかったと思います。でも頑張っていたんですよ。

クリスが掴んだらみんなも掴んで。でも弾き始めたら色々なことをやりだしてしまって、

忘れないようにとカセットレコーダーやらテープレコーダーやらに録音しようとバタバタでしたよ。

次の日になると前の日何やったかすっかり忘れてしまっていましたからね。

ちょっとバカ騒ぎしたり、ちょっと休憩してお茶を飲んだり。

でも『ここはDフラットじゃないか？Fはどうだ？』なんて議論もたくさんしましたよ。

こういったことがビルにとって苦痛なほど退屈だったんでしょうね。

試行錯誤ばかりで優柔不断で他にも案はないか迷ってばかりでしたから。

よくそんなふうによれたな、と不思議ですがあの頃はこうだったんですよ。

それが私のリハーサルの思い出ですね」とスティーヴは続ける。

「アルバム『危機』のリハーサルで一番覚えているのは、メロディーのリハーサルですね。

『同志』の大きくて流れるようなやつとかね。

長時間かけましたが、スタジオ入りしたら本当の意味で耳に入ってきたので結局もっと技巧を加えたか、変えたか、アレンジを良くしたかしましたよ。思ったよりずっとよかったです。ドラマチックって言葉がびったりだと思います。

『危機』と『同志』の緊張感でバンド内のドラマチックな気持ちがすごく高まっていたんですよ。

出だしの柔らかな音楽がとても心地よく、単純さと複雑さを絶妙にミックスしていると思います。

ジョンの素晴らしい歌声にミニモーグ、すると突然もっと大きくて壮大なフレーズが始まる。

このインパクトのあるコントラストのおかげで曲にノって絡み合う演奏ができたんだと思います。

あっちこっち飛んで行っていますよね。真ん中でイントロに戻ってくるのがすごく刺激的ですよ。そのすべてがとにかく豊かです。

12弦ギターは特別ですね。本当にいい12弦ギターは格別です」とスティーヴ。

「ゆっくり弾いてもいいし、音も2つ出せる。Variacじゃできませんよ。弦1本なら1つの音しかない。

でも弦が2本だと音が豊かになる。『同志』の12弦ギターがいいですよ。クリスのだったかな。

クリスがGuildの12弦を持っていて、よく見せてもらっていました。たぶんステージでも弾いたんじゃないかな、

クリスのテレキャスター・ベースも弾かせてもらったし。確か、パルスだったと思います。

『ユア・ムーヴ』でやったようなループみたいなやつでしたね。パーツの組み合わせ方がとてもクラシックだったと思います。

クリスと私がジョンの裏でレスリースピーカー越しに歌に入って、その後真ん中のセクションへどつとなだれ込む、

みたいに色々なことが起こる部分もあってとてもドラマチックで、たくさんのアイデアよくまとめられているなと思います。

何かが終わればそこから新しいものが始まる。非常に有機的でいいなと思います」。

エディが続ける。「『同志』は『危機』と同じように組み立てたんです。ちょっとずつちょっとずつ作っていったんです。

例えば、アコギのセクションにベースドラムのパルスがあるとすると、

クリスとビルでタイミングを合わせるのは本当に骨が折れました。

簡単に思えますが、お互いタイミングを合わせたまま1分2分演奏するのってとても大変なんですよ。

必ず誰かがずれてしまう。今ではほとんどの人がクリクトラックを使いますが、

あの頃はクリクトラックなんて使ったことがなかった。

テンポが多少速くなったり遅くなったりするぐらいは問題ありませんでしたが、それでも大変でした。

そこで、実際タイミングが合っていた部分が4つくらい見つかったので、

それをループにしてテープレコーダーで回し続けたんですよ。1m前後あったんじゃないですかね。

ループテープで流していいところで録音する。そうやって作ったんですよ」とエディは話す。

「おもしろいのが、ツアー中その音のパターンが暗号みたいになって、

ホテルの部屋にいて誰かがそのパルスの感じでドアをノックしたら、バンドの誰かだなんて分かるんですよ。

そうじゃなかったら会いたくない他の誰かだって分かるんです」。

「それぞれのパフォーマンスがどれもすごいと思いますね」と話すのはジェフ。

「アレンジの仕方とか。当然私は当時そこにいなくて、こうだったんだよって話を聴くだけですが、

メンバーそれぞれが音楽的に自分たちの限界を広げようとしていたんじゃないかなって思います。

とは言いつつ、確かに素晴らしい演奏なんですけれど、ジョンとスティーヴがこのアルバムで作ったメロディーがすごくキャッチーなものも注目すべきだと思うんですよ。本当に印象的なんです。『同志』のメロディーなんか名曲ですよ。

ただ楽器叩いてキモチよくなっているだけじゃないんです。

最高のパフォーマンスだけでなく、強烈なテーマがしっかり下に流れている、非常によく構成されたアルバムだったんです。

必ず『同志』を好きな曲のひとつに挙げるのは、輝かしくて、気持ちが上がる曲だからです。

アルバム全体に言えることですけどね」。

確かに、イエスの曲作りの力そしてその音楽の温かさは、技巧的レベルは高くとも情緒表現はどこか乏しいプログレジャンルでは異質だった。ジェイもうなずく。「イエスの音楽はただ頭で考えてテクニックを見せつけるだけじゃないんです。その中にたくさんのニュアンスや感情が流れていて、まるで終わりのない旅の行きつく先を探している感じなんです。それがなければもっと教科書通りの、算数問題のようになってしまう。それもそれですごいかもしれませんが、感情がこもっていないと何かが欠けているんですよね。イエスはすべてを実現しています。それが、このバンドと音楽が長く愛されている証拠だと思います」。

【写真】「単純さと複雑さを絶妙にミックスしているんですよ」と『危機』について語るスティーヴ・ハウ

「個人的にイエスの曲トップ5ですよ」とジョンが「同志」について話す。「叙情的に神秘的でロマンチックだと感じます。音楽的には、繊細でしんと静まり返ったところがあったと思ったら爆音で鳴らすパッセージもある。特に何十年もかけてステージ上で育った曲ですから。それから《Sad preacher nailed upon the colored door of time》ってフレーズは歌うのが楽しいんですよ。音楽としては、曲がギアチェンジしてオーディエンスも手拍子を始めるテンポになるんですよ。ちょうど『スターシップ・トゥルーパー』の『ディシリュージョン』みたいにね。それで、この曲で初めてボーカルが入るところでスティーヴと一緒にアコギをかき鳴らすんです。数ツアー前に、オープンEとオープンBを鳴らしながら3弦、4弦、5弦、6弦で同じコードを弾くことでフィナーレのメロディックなテーマに合わせられるって知ったんですよ。元々、少なくともライブではテーマがそんなふうにギターで演奏されたことはありませんでしたが、ギターにとってもよく合うんです。ステージではギターで弾きたいですね。スティーヴからは、私はクリーンで正確な弾き方をするって言われたことがあります。ギターで華を添える方法をどんどん見つけてくれるんです。「それに『同志』は素晴らしい大作ですよ」とビリーは語る。「本当に様々な動きや広がりを見せるんです。本当にすごい曲ですよ。非常に感動的な旋律もあって、真ん中はベースペダルでコードをループさせながら、硬く突き抜けるギターのテーマが被さってくる。ただ、ステージに立っていて『なんでこうなった？なんでここに立って弾いているんだ？』って思う時がたくさんあるんですよ。そういった考えを振り払ってちゃんと弾かないといけないんですが、それも自分の大好きな曲を弾く体験の醍醐味なんですよ」。

私はイエスの曲なら何でも好きっていう根っからのイエスファンで、どんなメンバー構成でやったかとか誰がいつやったかそういうので分け隔てはしないんです」とビリーは続ける。「ただ音楽を聴くだけです。『同志』は時代を超えて聴き継がれるイエスの名作の1曲だと思います。どういうわけか、『危機』、『同志』、『シベリアン・カートゥル』の3曲ともすごくぴったりはまっていて、レコード全体が1つの曲のように聴こえるんですよ。アルバムが展開する楽章なんです。『同志』は素晴らしい曲ですよ。弾くたびに、スティーヴがああハーモニーで始めると、自分の部屋に座って聴き入っていた子どもの頃に引き戻されます。今も目に浮かびます。レコードプレーヤーがあって、持っていたイエスのアルバムを全部出して、スロットカーコースがあって、模型を作る小さな作業台があって。スペインのガレオン船の模型を作るのにハマっていたんですよ、帆とかが付いたやつですね。子どもながら『同志』を聴きながら模型を作って——いい思い出ですよ。決して忘れられない経験です」。「『同志』はアレンジャーとしてのイエスの才能を発揮した、非常にしっかり構成されたアレンジなんです」とスティーヴは話す。「旋律が1つあれば、反対にしたり、こうしたり、逆さにしたり、そこから発展させたり。

このアルバムには別のすごい一面もあってね。もちろん、エディ・オフォードがスキルを磨いたことですよ」とスティーヴは続ける。「ギターの音を覚えていますよ。『同志』と同じく、12弦のアコギでかき鳴らして。

以前のアルバムでもかなりよかったです。このアルバムでは高度に発展して、プロデュースして、録音されたものを実現できました。エディがその中心で、ある意味私たちを導く存在だったんですよ。

エディなしでは上手く行っていなかったと思いますよ。

だってエディだけが一斉に色々演奏するメンバーをミックスすることができたんですから。

プログレまではそんなことができるバンドはいませんでしたよ。

【写真】エディ・オフォードとアラン・ホワイト

それまでは単純だったベース、それからドラムがあって、それが土台になっていた。

でもイエスではその土台を変えて、みんなが忙しくなったんです。

みんながただ楽器を叩くだけじゃなくて、何か本当に演奏するパートを見つけないといけなくなった。

叩くだけもなし、ブルースフレーズもなし。4/4拍子もなし。何もかもなしになったんです」。

スティーヴは続ける。「何か自分たちらしいものをつくらなければいけなかった。

『危機』はその創造力のハイライトのひとつだと思います。続く『リレイヤー』も同じアルバムの構成で、

アプローチもとても独特です。でも『危機』はすごい一言です」。

「スティーヴがアコギで弾いたものの多くがああ曲の原動力なんですよ」とジェフは話す。

「当時のスティーヴとリックみたいな人はギターを弾くだけとかキーボードを弾くだけじゃなかったんですよ。

こうした素晴らしいサウンドも作っていたんです。それが特徴だったんです。特にスティーヴの演奏ではね。

弦楽器系はお手の物ですよ。彼自身がミニギターオーケストラみたいなんです。

琴でも12弦のポルトガルギターでも何でも、面白そうなものは何でもやる。それが昔から人の心を掴むんですよ。

そんなスティーヴとウェイクマンそれぞれのミニオーケストラは本当に特別でした。

もちろん、当時リズムセクションを作り上げていたビルとクリスも忘れていませんよ。最高のベースでした。

それからジョン・アンダーソンの天使のような歌声が上に乗ってすべてをリードしている。

それにクリスとスティーヴのバックコーラスのボーカル」。

ジェフは続ける。「振り返って分析して、『あれやその結果だった』と断言するのはできません。

たくさん実験的なことをしていましたから。イエスの音楽が素晴らしいのは、いつもその実験性があるからだとも思います。

決して『よし、曲ができた、これを弾いて、次の曲をやろう』なんて言わなかったんです。

持っていたアイディアからできるだけ多くを得ようと努力していました。

それが、自分たちなりの音楽への向き合い方で本当に多くの人の耳と心を掴んできた理由のひとつなんだと思います」と

ジェフは語る。